<table>
<tr><td colspan="3">団体名</td><td>特定非営利活動法人 NPO 子どもネットワークセンター天気村
http://www.biwako.ne.jp/~nt-tenki/ （滋賀県草津市）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">団体の概要</td><td colspan="2">活動開始年</td><td>西暦 1987 年 4月 活動開始
西暦 1999 年 4月 特定非営利活動法人格取得</td></tr>
<tr><td rowspan="2">メンバー</td><td>人数</td><td>＜役員数＞ 9 名 ＜ボランティア数＞ 30 名
＜事務局スタッフ数＞ 2 名（有給2名；子どもを預かるという責任ある活動のため）
＜その他＞ 14 名（行政委託事業にかかるスタッフ職員）</td></tr>
<tr><td>構成</td><td>ボランティアは、大学生、高校生が中心</td></tr>
<tr><td colspan="2">予算規模</td><td>平成１３年度概算
・収入 12,790,240 円
・支出 12,651,362 円</td></tr>
<tr><td colspan="3">団体の目的</td><td>・子どもの健全育成：実体験や地域（ひと・もの・こと）交流を通じて、子どもたちの健やかな成長を支援すること
・地域社会の様々な環境の改善・整備：子どもの健全育成という視点から、地域交流の促進、住環境の保全、地域文化を継承すること</td></tr>
</table>

①ボランティア活動の概要

野外活動体験、障害児・健常児との交流、まちづくりワークショップ、子育て支援セミナー企画など、「学なおし、癒しなおし、生きなおし」の場として、新しい学びあいのスタイルを創り出している。主な事業は以下のとおり。

■ こんぺいとう自然保育園（月水木金：9：30～15：00）
子どもを身近な自然や地域の人とのふれ合いを通して、のびのびと育てようという保育園。

■ くさつ子育てランド（月～金：9：00～17：00）（草津市委託事業）
草津市の子育て相談、一時預かり業務、子育て情報誌の発行などを行う。

■ 栗東市障害児サマーホリディサービス事業（夏期 20 日間）
障害を持つ子どもたちのための夏期学童保育を実施（栗東市委託事業）。

■ くさつあそび隊（毎月１回程度、土日に実施）
幼児～小学生高学年までが対象。自然体験や里山保全、地域交流などを行う。

ボランティアは、ホームページ上やメーリングリストで、経験・年齢・職業などは問わずに随時募集している。子どもと遊びながら安全に注意したり、イベント運営の補助をしたりすることが、ボランティアの役割である。１日だけの体験参加も受け入れている。

子どもを預かるという責任ある活動でもあるため、ボランティアをとりまとめる事務局の有給スタッフを配置している。近年では行政からの委託事業費から事務手続き分として、事務局スタッフの人件費にあてている。

②ボランティア活動を立ち上げた経緯

1990 年の初め頃の草津市は、京都・大阪のベットタウンとして急速に発展してきており、他府県から小さい子どもを持つお母さん（専業主婦）が多く転居してきていた。ところが、近隣で幼児が遊べる場所が限られており、特に野外で遊ぶ機会は少なかった。このようなことから、専業主婦のお母さんが安心して子育てできるような支援、子どもの居場所としての受け皿を提供する支援などに対するニーズが高まっており、それに応える活動（現在のこんぺいとう自然保育園）を開始した。初年度から、こんぺいとう自然保育園の園児は30～40 人集まった（現在は、バス定員の関係上、一日の定員は 25 名までにしている）。

自然の中で子どもたちが農作業や冒険遊び、昔からの伝承遊びなどを体験する「こんぺいとう自然保育園」を軸に、活動の対象を幼児以外（小学生・障害児など）にも徐々に広げて、子どもたちととかかわる活動を展開している。

③活用した支援

法人設立の際に、淡海ネットワークセンター[3]の支援を受けた。特に法人設立に関わる様々な書類の作成、会計処理のノウハウなどについて様々なアドバイスを受けた。それまでの活動で、子どもの遊びや子育て支援に関わるノウハウは蓄積していたが、事務関係のノウハウは乏しかったので、こうした支援は不可欠であった。

また、地元の企業からお菓子などの商品をもらって、イベントなどで景品として活用している。地域の人にも、紙芝居名人などに活動に参加してもらったり、農地や公民館など活動場所を貸し出してもらったりするなどの協力を得ている。スタッフだけでは地域の情報を網羅しきれないので、子どもの遊び場などに関して地域でおすすめ情報などがあれば、気軽に教えてもらえるような地域のネットワークづくりをしている。

④ボランティア活動を行う上での困難点や課題

活動を立ち上げた当初は、地域の住民から活動に対してなかなか理解してもらえないこともあった。そこで、お祭りに子どもたちを連れて参加するなど、地域で行われるいろいろなイベントに積極的に関わった。こうした取り組みを通して、子どもに関わる活動団体として地域住民から徐々に認識してもらえるようになった。また、保護者の子育てに関わるいろいろな相談に気軽にのれるような体制づくりを心がけた。普通のお母さん同士が交流できる機会づくりに積極的に取り組んだ。

⑤今後の展望

2002 年度から、ボランティア（高校生・大学生）が気軽に立寄れ、ボランティア同士で歓談できるような場所を、施設内の一室に設けた。ボランティア同士の交流を促進することで、ボランティアからこういう企画をやってみたいというような意見を引き出せるとよいと考えている。

（団体事務局スタッフによるレポート、団体資料より作成）

---

[3] 財団法人淡海文化振興財団の愛称。ボランティア活動やＮＰＯの支援を行っている。

＜子どもネットワークセンター天気村＞

＜事例のポイント①＞　当事者のニーズをいち早くキャッチ

幼児とその親が集える場所がないという孤立しがちな専業主婦の育児状況に目を向けて、「保育に欠ける」といった福祉的立場の保育ではなく、家庭で子育てをしている人も含めて「保育を必要とする」人皆が子育ての時期の不安な気持ちを乗り切れるようなサポート活動を行っている。子育て中の親子という当事者から待ち望まれていた居場所は、当初想定していた定員を上回る利用者が集まった。

子育て中の親子とのかかわりのなかで、さらにキャッチされたニーズに基づき、対象を幼児から小学生や障害児などにも徐々に広げていくことで、“ 子ども ” を切り口にした多様な活動に発展している。

＜事例のポイント②＞　地域と接点を持ち、周知・連携をはかる

当団体は、子どもと保護者、地域住民、行政などにも理解をしてもらいながら、活動の幅を広げていることが特徴である。先駆的な活動であるがゆえに、「親の当然の義務である子育てを、なぜ支援する必要があるのか」などと、地域住民からは理解されにくい懸念もある。それを、地域のお祭り運営に関わるなど、団体内部だけで完結せずに地域と積極的に接点を持つことで、広く理解・認知される活動になっている。

こうした地域とのつながりが、情報・人材・物資について気軽に相談できる人や機関のネットワーク構築につながっており、これらの協力体制が団体単独の力では難しい部分についても対応が可能になっている。

＜事例のポイント③＞　気軽にボランティア参加できるアイディア

ホームページやメーリングリストで呼びかけたり、１日活動体験を受け入れたりするなど、若い世代が気軽にボランティアに参加しやすい雰囲気になっている。施設内にボランティア同士の交流スペースを設けるなどして、ボランティアの自発性を促すような工夫もされている。